

津波防災 どう立て直す

日本防災士会理事

橋本茂氏

今回の大震災は国の想定を遙方も大きく上回る規模だった。東海、

実をどう受け止めるのか。そして今回の経験を教訓に、津波防災をどう立て直すのか。防災全般に詳しい橋本茂日本防災士会理事と、沿岸災害が専門の間瀬肇京大防災研究所教授に話を聞いた。



はしもと・しげる 50年新潟生まれ。「防災士」制度創設に参画。NPO法人防災情報機構常務理事。



ませ・はじめ 53年名古屋生まれ。京大大学院工学研究科博士課程修了。07年4月から京大防災研究所教授。

ゼロベースで再考を

「想定外」という言葉だけでいい。宮古市の田老地区では、葉だけではない。津波の被害が、これまで防波堤があつたが、これまでに防波堤が壊された。ハード、ソフトの両面での津波被害を教訓として、生徒や教師の避難所が分散し過ぎると、行政からの情報などが届きにくくなる。数十人で避難している人たちは、数百人以上の規模にまとまることが必要になる。

「想定外」という言葉だけでいい。宮古市の田老地区では、葉だけではない。津波の被害が、これまで防波堤があつたが、これまでに防波堤が壊された。ハード、ソフトの両面での津波被害を教訓として、生徒や教師の避難所が分散し過ぎると、行政からの情報などが届きにくくなる。数十人で避難している人たちは、数百人以上の規模にまとまることが必要になる。

原発「最悪」にも備え

「最悪のケース」の参考回の大震災で無残な姿に。明治三陸地震ク

「最悪のケース」の参考回の大震災で無残な姿に。明治三陸地震ク

「最悪のケース」の参考回の大震災で無残な姿に。明治三陸地震ク

東日本大震災では千年に一度の割合でしか起きない津波が押し寄せ

京大防災研究所教授

間瀬肇氏

東日本大震災は、沿岸部に押し寄せた大津波が人々や建物を押し流し、未曾有の被害をもたらした。過去に津波を繰り返して受け、防災対策を整えていたはずの地域ですら惨事を食い止められなかった事

た。約500年にわたって断層が割れ、津波を引き起こす波源域が非常に広範囲になった。地震の規模はマグニチュード(M)9と巨大で、震源も比較的浅かった。さらに入り江が多い三陸の地形により津波のエネルギーが増幅するなど、いくつ

もの悪条件が重なった。前に同規模の大津波が

だつた1896年の明治三陸地震だ。貞観の大津波と比べると規模は小さいが、記録が残されていないので、過去の最大級として、被害を想定した

ラスの津波であれば持ちこたえられたと思う。1960年のチリ地震大津波の被害を最小限に抑え、国内外から多くの研究者が視察に訪れた宮古市の田老地区の防潮堤も

断でさらに高い場所まで避難していた。中学生は訓練で学んだ通りに先生の手を引いて避難を支援した。防災教育は有効であり、さらに啓発を進めなければいけない。

域が近いと想定していなかったのではないか。しかし原発の場合は予想を超えた事態が起きても何らかの対応ができる備えをしなければならぬ。東海地震が想定される地域にある浜岡原発は津波の被害想定を見直すとともに、最悪の事態にも備える必要がある。

居住域 高台に

津波を防ぐ機能を備え、世界一とも言われた釜石市の港湾防波堤が今

今回の大震災で無残な姿に。明治三陸地震ク

想定見直しを

福島第一原発で事故が起きたが、これほど大きな津波を引き起こす震源

今回の大震災では指定された防災施設に避難しなからなくなった方もいる。津波や揺れが想定を超えた場合でも、被害を低減できるような仕組みづくりが今後の課題だ。